

新図書館建設に向けて

アクティブ・ラーニングに 対応する新図書館

1 バリ万国博覧会と報告書 1855-1937-西南学院大学図書館蔵書を中心に-

第4回 1931年バリ万博 & 1937年バリ万博

図書館長 後藤 新治

2 研究ノートから

「不確実性から幸福度が見える？」経済学部 経済学科 教授 仲澤 幸壽

ブラウジングルーム

「コミュニケーション学の成長記録」文学部 外国語学科 英語専攻 准教授 鳥越 千絵

3-4 新図書館建設に向けて

第3回 アクティブ・ラーニングに対応する新図書館

図書情報課 八尋 英美子

5-6 データベース紹介

Westlaw International 法学部 法律学科 教授 奈須 祐治

米国税制・経済改革オンラインデータベースのご紹介 経済学部 国際経済学科 教授 立石 剛

新聞記事は電子で探す 図書情報課 山下 大輔

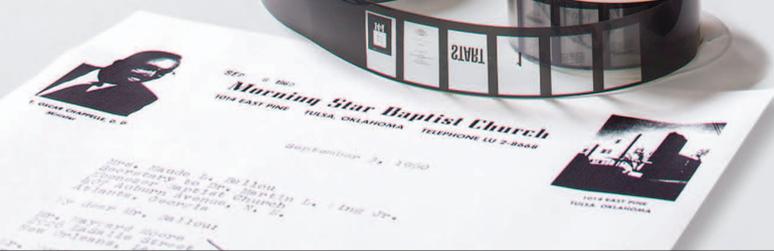
7 蔵書ギャラリー no.18

『南部キリスト教指導者会議記録、1954-1970』

神学部 神学科 教授 金丸 英子



SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2014. October No.177



パリ万国博覧会と報告書

1855-1937

—西南学院大学図書館蔵書を中心に—

第4回 1931年パリ万博&1937年パリ万博

図書館長 後藤 新治

最終回は風雲急を告げる1930年代に開催された2つの国際博覧会です。19世紀半ばにロンドンで始まった万国博覧会はずいぶん時代を映し予知する「鏡」として機能してきました。今回は紙面の都合で各報告書は書名紹介のみにとどめ、最後にその後入手した資料を「補遺」のかたちで追加しています。発刊時点でパリ万博関係報告書は総計30件55冊となりました。

植民地パヴィリオンが1878年のパリ万博以来人気を博したことは前にも述べました。1906年には最初の国内植民地博覧会がマルセイユで開かれましたが、第一次世界大戦のため延び延びになっていた国際植民地博覧会開催の願いは、会場をこれまでのシャン・ド・マルスからパリ東郊ヴァンセンヌの森に移し、1931年にやっと実現しました。植民地という「他者」を分類したうえで、これを野生の動物園に始まりアール・デコ様式のフランス政府パヴィリオンで終わる進化的系譜の中に「正しく」位置づけ表象するという主催者の意図は、従来の娯楽的要素や異国趣味を極力排除して、「科学的で啓蒙的」なく文明の伝道を展示することでした。しかし多くの矛盾が露呈したのも事実で、シュルレアリストなど一部の人間々からその欺瞞性が強い、非難を浴びました。

E. ニコル編『1931年パリ国際植民地博覧会横断』(Bib. 1)、『1931年パリ国際植民地博覧会フランス領インド』(Bib. 2)、J. トリヤ序『1931年パリ国際植民地博覧会図録』(Bib. 3)、『フランス博覧会委員会及び植民地博覧会国内委員会50年史1885-1935』(Bib. 4)の4件4冊。ハイブリッドな建築群は今日のテーマパークそのもの。

国内では初の人民戦線内閣が誕生し、国外ではスペイン内乱、イタリアのエチオピア併合、日中戦争が起きる中、「調和のとれた世界」を目指して1937年に開催されたのが「現代生活における技術と芸術の融合」を謳った博覧会。トロカデロ宮にかわって新古典様式のシャイヨー宮が出現し、近代美術館(現在のパリ市立美術館とパレ・ド・トーキョー)が出来ました。セーズ河畔ではスターリンのツ連館とヒトラーのドイツ館がにらみ合い、スペイン館にピカソが「ゲルニカ」を出品したのもこの博覧会。軍靴の音がすぐ近くまで忍び寄っていました。

『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会公式総合カタログ』全2冊(Bib. 5)、A. ラプラド序『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会図録』(Bib. 6)、R. マルシャン編『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会パリの建築職人たち』(Bib. 7)、J. グレバール編『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会図録外国部門』(Bib. 8)、J. グレバール編『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会図録外国部門』(Bib. 9)の5件6冊。坂倉準三設計の日本館が建築部門でグランプリを受賞したのは快挙。

最後に補遺。『1878年パリ万国博覧会図説貿易・産業・農業・芸術』(Bib. 10)、A. カンタン編『1900年パリ万国博覧会世紀の博覧会』(Bib. 11)、J. メイヨ編『1925年パリ現代産業装飾芸術国際博覧会のための都市型キオスクとパヴィリオン』(Bib. 12)、『20世紀現代産業装飾芸術百科事典』全12冊(Bib. 13)の4件15冊。掉尾を飾るアール・デコ「百科事典」は各巻96枚合計1152枚の図版収録。

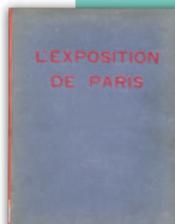
事実上最後となる1937年パリ万博の2年後、第二次世界大戦が始まりました。ご愛読ありがとうございました。
(国際文化学部 国際文化学科 教授)

<参考文献>

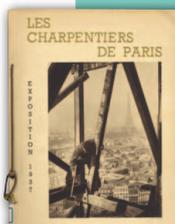
- Bib. 1) Nicoll, Edna L. *A Travers l'Exposition Coloniale; assistée de Suzanne Flour, préface du maréchal Lyautey*, Paris, Editions Edna L. Nicoll, 1931, 230pp., n.p. [5pp], 274x217mm. [開架 606/9/3-3] Bib. 2) *L'Inde française: Exposition Coloniale Internationale, Paris 1931*, Paris, [Frazier-Soye], 1931, n.p. [28pp], 285x228mm. [開架 606/9/3-4] Bib. 3) Trillat, Joseph (Introduction par). *L'Exposition Coloniale de Paris, Paris*, Librairie des Arts Décoratifs, [1931], n.p. [8pp], 54 planches, 335x260mm. [開架 606/9/3-1] Bib. 4) *Cinquantième 1885-1935: Comité Français des Expositions et Comité National des Expositions Coloniales; réunis par décret du 10-Juin 1925*, Paris, Comité Français des Expositions, [1935], 5pp, 328pp., 285x230mm. [2013年度教育IP購入図書→図書館所蔵予定] Bib. 5) *Exposition Internationale des Arts et des Techniques dans la Vie Moderne Paris 1937: Catalogue Général Officiel*, Paris, R. Stenger Editeur, 1937, 2 vols: tome I Liste des exposants (2e Edition), 861pp+72pp., 219x1140mm; tome II Catalogue par pavillons, 495pp., 219x140mm. [2013年度教育IP購入図書→図書館所蔵予定] Bib. 6) Laprade, Albert (Introduction par). *L'Exposition de Paris, Paris*, Librairie des Arts Décoratifs, 1937, n.p. [12pp], 42 planches, 331x257mm. [開架 606/9/3-2] Bib. 7) Marchand, René. *Les Charpentiers de Paris: Exposition Internationale de 1937*, Mulhouse - Dornach, [Braun & Cie], 1938, n.p. [64pp.], 315x243 mm. [開架 606/9/5] Bib. 8) Gréber, Jacques (Introduction par). *Pavillons Français: présentation de Henri Martin*, Paris, Editions Art et Architecture, [1938], n.p. [4pp.], 48 planches, 326x228mm. [開架 606/9/4-1] Bib. 9) Gréber, Jacques (Introduction par). *Exposition 1937: Sections Etrangères; présentation de Henri Martin*, Paris, Editions Art et Architecture, [1938], n.p. [4pp.], 48 planches, 326x228mm. [開架 606/9/4-2] ■補遺 Bib. 10) *The Paris Exhibition of 1878: An Illustrated Weekly Review of Trade, Industry, Agriculture and Art*, London, F. MacCann, 1878, 616pp., 382x281mm. [開架 606/905/1] Bib. 11) Quantin, Albert. *L'Exposition du Siècle: 14 avril - 12 novembre 1900 Paris; ouvrage édité par la revue Le Monde Moderne*, Paris, [Librairies - Imprimeries Réunies], [1900], 367pp., 305x235mm. [開架 606/9/26] Bib. 12) Mayor, Jacques. *Kiosques & Pavillons Urbains: destinés à l'Exposition Internationale des Arts Décoratifs Modernes Paris 1925*, Paris, Ch. Moreau Librairie d'Art Industriel, 1925, n.p. [8pp.], 32 planches, 337x244mm. [2014年度教育IP購入図書→図書館所蔵予定] Bib. 13) *Encyclopédie des Arts Décoratifs et Industriels Modernes au XXème Siècle en douze volumes: Imprimerie National, Paris*, Office Central d'Éditions et de Librairie, [1925], 12 vols: vol. I, 118pp., 285x235mm; vol. II, 102pp., 285x235mm; vol. III, 112pp., 285x235mm; vol. IV, 100pp., 285x235mm; vol. V, 105pp., 285x235mm; vol. VI, 102pp., 285x235mm; vol. VII, 106pp., 285x235mm; vol. VIII, 104pp., 285x235mm; vol. IX, 108pp., 285x235mm; vol. X, 106pp., 285x235mm; vol. XI, 108pp., 285x235mm; vol. XII, 114pp., 285x235mm. [2014-2015年度図書館購入予定図書]



Bib. 5 『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会公式総合カタログ』全2冊



Bib. 6 A. ラプラド序『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会図録』



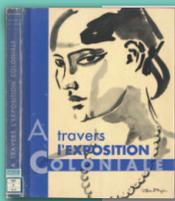
Bib. 7 R. マルシャン編『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会パリの建築職人たち』



Bib. 8 J. グレバール編『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会図録 フランスパヴィリオン』



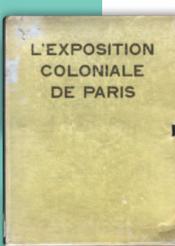
Bib. 9 J. グレバール編『1937年パリ現代生活における技術芸術国際博覧会図録 外国部門』



Bib. 1 E. ニコル編『1931年パリ国際植民地博覧会横断』



Bib. 2 『1931年パリ国際植民地博覧会 フランス領インド』



Bib. 3 J. トリヤ序『1931年パリ国際植民地博覧会図録』



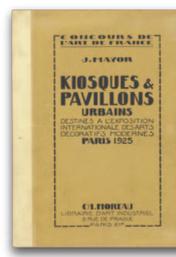
Bib. 4 『フランス博覧会委員会及び植民地博覧会国内委員会50年史1885-1935』



Bib. 10 『1878年パリ万国博覧会図説 貿易・産業・農業・芸術』



Bib. 11 A. カンタン編『1900年パリ万国博覧会 世紀の博覧会』



Bib. 12 J. メイヨ編『1925年パリ現代産業装飾芸術国際博覧会のための都市型キオスクとパヴィリオン』



Bib. 13 『20世紀現代産業装飾芸術百科事典』全12冊



Bib. 13 『20世紀現代産業装飾芸術百科事典』全12冊背表紙

不確実性から幸福度が見える？

経済学部 経済学科 教授 仲澤 幸壽

日々の生活は不確実性に取り囲まれています。新しくできたラーメン屋さんがおいしいかどうかから、好きになった人が付き合ってくれるかどうかまで、ともかく不確実性だらけです。ラーメン屋さんは食べてみれば分かりますが、好きになった人にはそんなに気軽に告白できないですね。当たり前ですが、時と場合とで行動パターンは変わります。経済学の中には、不確実性の下での人々の行動パターンを研究する分野があります。かつては経済心理学と呼ばれ、いまでは行動経済学という名称に変わった分野です。結構売れた啓蒙書もあって、一般の方々にも人気のある分野です。ですが、行動経済学本来の研究は、相当にやり尽くされた感があります。すると学問の常として、別の方向への発展が模索されることとなります。そんな折に、どのような経済であれば人々の幸福感や満足感が高くなるのかという問題が脚光を浴びる研究対象として登場し、行動経済学者の中にも興味を抱く研究者が出てきました。きっかけとなった文献で特に有名なものが、写真にある『暮らしの質を測る』という本です。

この本は、当時のフランス大統領によって組織された諮問委員会、通称スティグリッツ委員会という、複数のノーベル経済学賞受賞者を含む多国籍の知識人からなる委員会による答申書です。世界的に著名な

メンバーの委員会ということもあって、多くの学問分野の人々の関心を惹き、幸福度の経済学という新分野の広がりを促しました。どちらかという読み易くはないのですが、経済状態の良さを測る新しい指標を作ろうという熱意と高揚感がよく伝わってきます。実は、国民の幸福度については古くから世界各国で調査され、経済の変化の割には満足度が変化しないというパラドクスも知られています。おいしいラーメンを食べることも、好きな人と付き合うことも、慣れてしまうとさほど嬉しくなくなるということですかね。そんなこともあって、新しい指標を作るのはそう簡単なことではありません。それだけでなく、自分を高めるために教育の機会が保障されているかとか生きがいを感じる職業につけるかとか人間関係が作り易いかとか、多面的な要素が複合的に関係します。当然、人々の考え方が大きな部分を占めるので、そこに行動経済学が貢献できるのではと考えられているのです。ところで、あなたは幸福を感じるってどういうことだと思いますか。

注：ジョセフ・E.スティグリッツほか著『暮らしの質を測る：経済成長率を超える幸福度指標の提案』金融財政事情研究会、2012年 【開架3階 361/9/115B~D】



ブラウジングルーム

コミュニケーション学の成長記録

文学部 外国語学科 英語専攻 准教授 鳥越 千絵

みなさんにとって、コミュニケーションとは何を意味しますか？会話をすることでしょうか。意思疎通の手段でしょうか。それとも人と人とをつなぐ絆のようなものでしょうか。私たちにとって身近でありながら、何だか掴みどころのないコミュニケーションというものを研究しているのが「コミュニケーション学」です。

コミュニケーション学のルーツはアリストテレスやプラトンの時代まで遡るのですが、学問としてはまた新しく、学問分野として認められるようになったのは1960年代から70年代あたりでしょうか。この時期には、メディアの影響や人間のコミュニケーション行動を科学的に分析、説明、予測をしようという動き、すなわちコミュニケーションの理論化が盛んに行われました。研究者たちはこぞって社会学や心理学をはじめとする様々な学問分野から概念や理論を取り入れ、そこにコミュニケーションという視点を加えていったのです。そうすることで、コミュニケーション理論の数は爆発的に増えていきました。

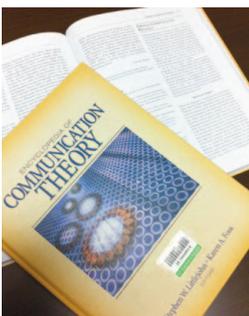
理論の数＝学問分野の発展とは単純には言えませんが、コミュニケーション学が学際的な学問分野として発展したことがよくわかる資料が西南学院の図書館にはあります。その資料とは、2009

年に出版された『Encyclopedia of Communication Theory』で、スティーブン・リトルジョンというコミュニケーション学者が編集しています。彼は1978年に『Theories of Human Communication』を出版しているのですが、これはおそらく初めての体系的なコミュニケーション理論の概説書で、多くの人に読まれてきました。今回ご紹介している本もコミュニケーション理論の概説書なのですが、1978年のものとは比べ物にならない数の理論が掲載されており、まさにEncyclopedia(百科事典)といえる厚みと重さなのです(しかも2冊組！)。実物を初めて目にしたときには、30年間でコミュニケーション学がここまで大きくなったのかと驚いたものです。

この本は、専門書というよりは、子供の成長を記録したアルバムのようなものとも言えるかもしれません。コミュニケーション学が親兄弟(西洋哲学、社会学や心理学、社会言語学など)から色々なことを学びながら成長し、時には親に反抗し、新しい友達を作り(アジア哲学、フェミニズム、クイア理論など)、喧嘩をしながら新しいものを生み出していくという過程がこの本には記されています。出版からもう5年。そろそろ新しいアルバムのページが追加される頃なのではと楽しみに待っているところです。

参考文献

Littlejohn, S. W. . *Theories of Human Communication*, Merril, 1978. [開架(5層) 361/5/522]
Littlejohn, S. W. & Foss, K. A. (Eds), *Encyclopedia of Communication Theory*, Sage, 2009. [開架4階 361/45/754-1~2]



「アクティブ・ラーニングに対応する新図書館」

(図書情報課 八尋 芙美子)

新図書館では、今後、大学の授業形態で重要となる「アクティブ・ラーニング」をふまえた学習・教育・研究をサポートする施設とサービスを検討しています。今回はその「アクティブ・ラーニング」とは何なのかについて、具体例と共に見ていきます。

1. アクティブ・ラーニングとは

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」の用語集ではアクティブ・ラーニングは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解

決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と定義づけています。

また、京都大学の溝上慎一教授はアクティブ・ラーニング型の授業とその授業内で質を高める装置としての手法を下記の図のようにまとめています。

アクティブラーニング型授業の質を高める装置

さまざまなAL型の授業

- **学生参加型授業**
e.g. コメント・質問を書かせる/フィードバック、理解度を確認(クリッカー、授業最後/最初に小テスト/ミニレポート)
- **各種の共同学習を取り入れた授業**
e.g. 協調学習/協同学習
- **各種の学習形態を取り入れた授業**
e.g. 課題探求学習/問題解決学習
- **PBLを取り入れた授業**
e.g. Problem-Based Learning/Project-Based Learning
- **ほか: ピアインストラクション、TBL(チーム基盤型学習)**

AL型授業の質を高める装置

- **書く・話すというアウトプットの活動**
コメント用紙、レポート、ディスカッション、討論、プレゼンテーションなど
- **さまざまな他者の視点を取り入れ、自己の理解を相対化させる**
学生同士、教員、専門家・地域住民など外部者など
- **宿題・課題を課す(授業外学習)**
- **レポート・提出物のフィードバック**
- **新たな知識・情報・体験へアクセスさせる**
調べ学習、体験学習
- **リフレクション**
形成的・総括的評価
- **多重評価**
小テスト、発表、質問、プレゼンテーション、学生同士のピア評価など

Point 1 Active Involvement
(課題・他者)への積極的関与

Point 2 Active Communication
公共圏の他者とのコミュニケーション

[出典:溝上(2013)P.280]

この図を見てわかるように、現在行われている授業でもすでに行われていることも多い印象を受けます。例えば、「ゼミ」と呼ばれる演習授業では、お互いがあるテーマについて本や論文で学んできたことをレジュメにまとめ、報告発表をし、質問・意見を出し合い共有して議論をします。

また、溝上(2007)は、アクティブ・ラーニングの授業形態を次のように分類しています。

- **講義型授業**
(「教員の話が中心である授業」)
- **演習型授業**
(「学生の活動が中心である授業」)
- 課題探求型
- 課題解決型

演習型授業のうち、「課題探求型」とは、「主として自由テーマによる調べ学習で、最後の結論は学習内容に依存する、いわゆるアウトプット型の学習」。「課題解決型」とは、「受講学生に課される課題のもと学習を展開させる、いわゆるアウトカム型の学習」「探求や広がり多様性はあっているが、あらかじめ大まかな学習内容が設定されていて、最後はそこに帰着するように考えられていることが多い」と分類しています。

ここで重要なのは、アクティブ・ラーニングというと、演習型の授業をイメージしますが、実はそうではないのです。講義型でも学生同士2~3人のミニ・ディスカッションを取り入れたたり、コメント・質問を書かせてフィードバックをする、クリッカーを用いて理解度を確認したりなど、様々な技法が取り入れられてきています。つまり、授業形態の問題ではなく、授業の中でいかに学生の認知の姿勢をアクティブにするかが重要なのです。

2. 先行事例の紹介

ここでは、特にアクティブ・ラーニングを想定し、学習支援を打ち出している事例を2つ紹介します。

2-1. 千葉大学アカデミック・リンク・センター

千葉大学は2011年に「アカデミック・リンク」という新しいコンセプトを打ち出しました。「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」、を持つ「考える学生」を育成するために、附属図書館、総合メディア基盤センター、普遍教育センターが協力して立ち上げたものです。

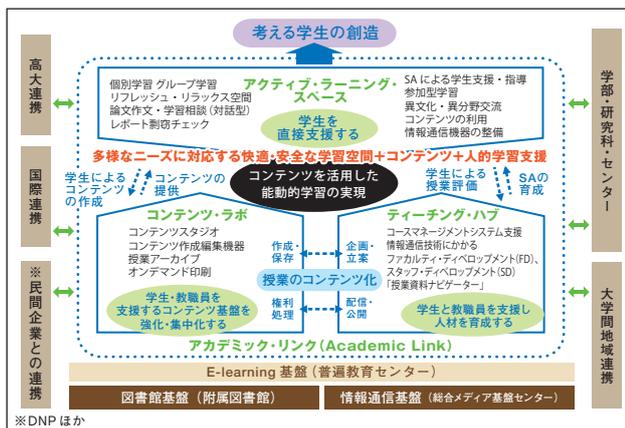
アカデミック・リンクは、「学習とコンテンツの近接」による能動的学習を実現するために次の3つの機能を備えています。学生が自ら問題意識を持って、自発的に学ぶことができるように、学習環境とコンテンツ提供環境を一つにしようという試みなのです。

アクティブ・ラーニング・スペース	学生が、さまざまな資料、コンテンツ、情報通信技術、あるいは学習を支援する人々(教員、図書館員、学生スタッフ)を最大限活用しながら、グループや個人で学習を行う場、また、自らの学習の成果を公表する場。
コンテンツ・ラボ	授業の事前事後学習やさらにその主題について掘り下げて学習するために役立つ図書やWebサイトを案内する「授業資料ナビゲータ」を強化するとともに、「授業資料ナビゲータ」で提供される資料や授業で使う教材の電子化、授業そのものの録画などを行う。そして、それらのコンテンツをラーニング・マネジメント・システム(LMS)等も介して提供する。
ティーチング・ハブ	LMSの運用を支援するとともに、教材の電子化や情報通信技術の教育への応用等のためのファカルティ・ディベロップメント(FD)、アクティブ・ラーニング・スペースで活動するチューデント・アシスタント(SA)の育成を行う。

アカデミック・リンクの施設の中核をなす附属図書館は、増改築によって次の4つの建物で構成されています。各棟はコンセプトが明確に分けられています。

L棟 Learning 黙考する図書館	古くからの図書館の建物を改装(2014年10月リニューアルオープン)。一人静かに思考する学習空間(静寂閲覧室)、集密書庫、開架書架の他リラックス目的のラウンジやアクティブラーニングスペースも設置。
I棟 Investigation 研究・発信する図書館	研究開発、コンテンツ制作の拠点として、アクティブ・ラーニングに適した新しいタイプのセミナー室や授業の収録が可能なコンテンツスタジオなどが設置されている。
N棟 Networking 対話する図書館	複数で対話しながらの学習をコンセプトとした棟。キャスター付きの机やイス、ホワイトボードを配置している。学生は自由に動かすことができ、必要に応じて大きなテーブルを作ったり、少人数に分かれたりすることができる。また、学生用のデスクトップPCも設置している他、iPadやノートPCも貸出す。
K棟 Knowledge 知識が眠る図書館	伝統的な書庫の機能を中心に考えられた建物。貴重書室、マイク図書、巨大な電動集密書架などを備えた知識集積拠点。

同じ話をする人はこう理解し、またある人は違った理解をしている。それらを交流させる、つまり他者の視点を取り入れることが、アクティブ・ラーニングの重要なポイントだと言われています。自分の考えをまとめ、他者に公表し、フィードバックをもらい振り返って考えるという過程が大事です。それらの全ての段階を大学としてどうサポートしていくか、アカデミック・リンクの取り組みはそれを明確に打ち出して日本初の試みとして注目されています。



※DNPほか
アカデミック・リンク概念図 [出典:千葉大学アカデミック・リンク・センター ホームページ]

2-2. 同志社大学 良心館ラーニング・コモンズ

同志社大学は2013年に今出川キャンパスに建築した新校舎「良心館」の2・3階にラーニング・コモンズをオープンしました。コモンズの面積としては日本最大級で、図書館ではなく教室棟の中心部に設置されているところが特徴的です。運営は学習支援・教育開発センターが担当しています。

施設は2フロアで構成されており、2階は「クリエイティブ・コモンズ」と呼ばれ、「学びの交流と相互啓発」をコンセプトに、プレゼンテーションコート、グループワークエリア、インフォダイナー、グローバルビレッジの4つのエリアがあります。3階は「リサーチ・コモンズ」と呼ばれ、「アカデミックスキルの育成空間」をコンセプトに、専属教員らのサポートを受けながら、実践的スキルを身につける空間になっています。アカデミックサポートエリア、グループスタディールーム、ワークショップルーム、マルチメディアラウンジ、自習検索エリア、プリントステーションなどの6つのエリアがあります。

同志社大学のラーニング・コモンズで特に注目すべきなのは、人的支援の部分です。学習支援のための人的資源が各エリアに配置されています。

- アカデミック・インストラクター(専属教員)
- 学習支援コーディネーター(学習支援・教育開発センター職員)
- 学習支援アシスタント(学部学生)
- ラーニング・アシスタント(大学院生)
- 情報探索アシスタント(図書館職員)
- 留学コーディネーター(国際センター職員)
- 留学アシスタント(国際センターから 留学経験者)
- ICTサポートスタッフ(ITサポートオフィスから 専門家・学生)
- プリントステーション・スタッフ(業務委託)
- 受付カウンター(業務委託)

全体を運営する学習支援・教育開発支援センターだけでなく、図書館、国際センター、ITサポートオフィスからも職員や学生が配置されているのです。これほど広範囲で手厚い人的支援は日本でまだ他に見られません。

千葉大学の例と同様、学習の全ての段階をサポートする機能とサービスが備えられています。人的支援が充実していること、国際交流や留学との接点となるサポートがあること、コピーやポスターなどの印刷物のデザインや著作権の指導もあることが特徴的です。

3. 新図書館で何が必要か

2で見てきたように、どちらの大学も自分の大学の教育内容、キャンパスの状況に合わせた利用者目線でのサポートと施設が特徴的でした。私達の新図書館でも形は違いますが、同様のサポートができるよう準備を進めています。しかし、図書館単体では実現できるものではありません。学内の関係部署だけでなく教員、職員の全学的な協力体制が必要です。新図書館では施設を作るだけでなく、アクティブ・ラーニングを含めた本学の教育に対して、理論(教授法や学習科学)の裏づけをもって、学習の全ての段階をサポートするサービスも提供していきます。

【参考文献】

- 「最終回:高等教育のフロンティア「理論」:「アクティブ・ラーニング」(特集:2008年度Beating特集「5分で分かる学習フロンティア」)メールマガジン「Beating」第58号, 2009
<http://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/archives/beat/beating/058.html>
 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」2012年
 同志社大学 良心館ラーニング・コモンズホームページ
<http://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/>
 千葉大学アカデミック・リンク・センターホームページ
<http://alc.chiba-u.jp/>
 溝上慎一「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」名古屋高等教育研究, 7, p.269-287, 2007
 溝上慎一「何をもってディープラーニングとなるのか?—アクティブラーニングと評価—」河合塾「深い学び」につながるアクティブラーニング」東信堂, 2013, p.277-298
 (※Web参照は全て2014年8月25日です)

DATABASE

データベース 紹介

今回でデータベースの紹介も3回目となりました。データベースの中には、現在のように電子資料が一般的になる前から紙媒体で利用されてきたものも多数あります。有用な情報を得るために膨大な時間と労力がかかっていたことが、データベース化されたことで一瞬にして情報を得られるようになりました。外国語の資料群から有用な情報を抽出したり、昔の資料と最近の資料とを関連付け広い時間軸で情報収集したりと、格段に調査・研究の対象が広がっています。

Westlaw International

法学部 法律学科 教授 奈須 祐治

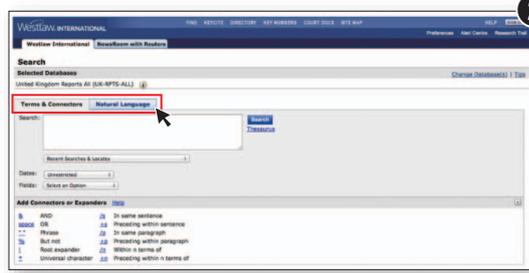
アクセス方法：図書館HP>データベース>テーマから探す:法令>Westlaw International

法律情報データベースWestlaw Internationalは、1872年にミネソタ州で設立されたWest Publishingが発行していた判例集、National Reporter Systemを起源とする。National Reporter Systemは、早くから米国内の標準的判例集としての地位を獲得していた。1970年代になって、後にWestlawのライバルとなる、法律情報データベースLEXIS(現在はLexis等のいくつかのデータベースとして展開)がサービス提供を開始し、コンピュータによる法律情報検索システムが開発される。これに対抗して1975年にWest PublishingがWestlawを立ち上げる。これが後にネットの普及とともに、本格的なデータベースとして普及していく。1996年、West PublishingはカナダのThomson Corporation(現・Thomson Reuters)の傘下に入る。日本では2006年、Thomson Reutersと新日本法規出版の協同出資でウエストロー・ジャパンが設立されている。同社はWestlawの国際版であるWestlaw Internationalのほか、日本法に特化したデータベースWestlaw Japan等を提供している。本稿で紹介するのは、前者のWestlaw Internationalである。

Westlaw Internationalは、世界各国の裁判例、法令、学術論文、公文書等を収録しており、特に米国の情報は非常に豊富である。収集の仕方は簡単で、もし調べたい文献が決まっていれば、かつ引用番号が分かっているなら、トップページ左上のFind by citationの検索窓に入力すればよい。たとえば、いわゆるオバマケアを合憲と判断したNational Federation of Independent Business v. Sebelius, 132 S.Ct. 2566という判例を調べたい場合、「132 S.Ct. 2566」を検索窓に入ればよい①。

もちろん特定の用語から文献を検索することもできる。Westlaw Internationalは28,000以上ものデータベースから構成されている。適切なデータベースを

トップページのディレクトリから探して、その中で検索をかけることになる。たとえば英国の判例を検索したい場合、United Kingdom Reports Allというデータベースに入り、Terms & Connectors、またはNatural Languageのいずれかで検索することができる②。前者は特定のキーワードと結合子を用いて検索結果を絞り込むもので、後者は通常の単語による検索手段である。



WestlawにはKeyCiteという機能が搭載されている。ある判例の検索結果の左欄の上にあるFull Historyをクリックすると、この判例の訴訟経過、この判例が後の裁判所にどのように扱われたかが一覧表示される(ちなみにDirect Historyをクリックすれば、この判例の訴訟経過がチャートで表示される)。この判例が覆されている場合は左上に赤の旗が、消極的な扱いを受けている場合は黄色の旗が表示される。論文の場合は、当該論文がどの程度引用されているかが明らかになり、その論文の重要性を把握できる。

Key numbersという機能も特徴的である。トピックごとにkey numberがふられており、それがいくつものサブカテゴリーに細分化されている。たとえば、ある判例を見ると、key number 170B Federal Courtsというトピックが表示されていて、それがさらに、170B X VI Supreme

Court, 170B X VI(B) Decisions Reviewableと細分化されている。特定の調べたいテーマがある場合には、このKey numbersを利用し、別のトピックと組み合わせたり、日付を絞ったりしながら判例を探し当てられる。

このほかにも自分が追いかけている判例等に変更が加えられたりした際に通知してくれるKeyCite Alert等の機能もある。すべて英語なのでハードルは高いが、利用価値の大きいデータベースなので特に法学を学ぶ学生には利用をお薦めしたい。

米国税制・経済改革オンラインデータベースのご紹介

経済学部 国際経済学科 教授 立石 剛

アクセス方法：図書館HP>データベース>テーマから探す:経済>米国税制・経済改革オンラインデータベース

皆様こんにちは。私はアメリカ経済論を担当し、金融肥大化というアメリカ経済の構造変化とそのアメリカ国内外への影響について研究を行っています。その関係上「米国税制・経済改革オンラインデータベース (TAXATION & ECONOMIC REFORM IN AMERICA)」の導入を申請させて頂いたところ、図書館の方々ならびに同僚の先生方のお力添えもあり、無事に私学助成を受けて導入することが出来ました。そのお礼も兼ねて本データベースをこの場をお借りして紹介させていただきます。

アメリカ経済を分析する際のアプローチは多様ですが、私はアメリカ経済の制度および構造の歴史的变化に注目し、その背後にあるアメリカ経済の特徴ならびに経済思想や経済理論のあり方や世界全体へのインパクトを考えるとアプローチを取っています。その際、私はアメリカの経済関連法制度そのものや議会資料を渉猟することで、分析の糸口を得よう試みています。この手法をとる場合、本データベースは以下の点で効果的です。

第一に、アメリカ三大教書の一つの「大統領経済報告」が全て収録されていることです。これには歴代各政権による経済政策全般の基本的理念や立場が反映されており、経済政策を分析するのに欠かせない基本書です。国民向けに執筆されていますので、非常に洗練され分かりやすい文章になっています。アメリカ経済に関心のある学生諸君は英語の勉強も兼ねて大統領経済報告を読破することをお勧めします。

第二に、主要な経済関連法を網羅していることです。冷戦後の税制の基礎となった「1990年包括財政調整法」、テロ後の税制を象徴した「2001年経済成長減税調整法」、ニューディール以降の金融システムの基礎をなした「1933年銀行法」、それを解体した

「1999年金融サービス近代化法」、そして金融危機後の金融システムのあり方を規定する「2010年ドッド=フランク・ウォール街改革・消費者保護法」など、経済活動に長期的な影響を及ぼす主要法が収録されています。

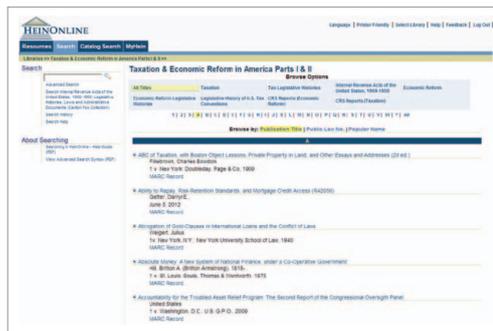
第三に、議会議事録 (Congressional Record) のうち主要法関連議事録が収録されていることです。アメリカ議会では、法制定に関連した上下両院での議事、調査報告書、そして

公聴会記録が議会議事録としてまとめられます。これらの資料には、法制定・運用の背景や論点など、経済政策を分析する際の題材となる情報が多く含まれています。さらに本データベースは、主要な経済関連法に関する議事のみを収録していますので、膨大な議事録の中から情報を発掘しそれをまとめるという手間のかかる作業をしなくても済みます。

第四に、検索機能を使った資料の分類整理が可能になります。私は、大学院生のころにアメリカンセンターに通い、1年以上遅れて発行される膨大な量の議事録やマイクロフィッシュの中から有益な情報

を読みながら探すという作業を行っていました。まさに図書館に籠って感じでした。この手法では膨大な時間がかかりますが、資料全体に目を通すことで全体像をつかむと同時に、情報を探し出す嗅覚を鍛えるという意味で有益な側面もあります。これに対して本データベースの「検索機能」を使うと、一瞬にして知りたい情報の有無が分かるのです。あたかも私用に非常に有能な秘書兼ライブラリアンを雇ったような感じですね。研究の方法も変わり始めているようです。

本データベースの内容は主に経済関連ですが、医療制度改革など社会問題に関連する事項も収録されています。これを機に皆様にご活用いただければ幸いです。



新聞記事は電子で探す

図書情報課 山下 大輔

アクセス方法：図書館HP>データベース>テーマから探す:記事>ヨミダス歴史館

突然であるが、小生はペンギンが大好きだ。間抜け(に見える)鳥全般(アヒル、カモ、ガチョウ類)が好きなのであるが、中でもペンギンは格別なのだ。物心ついた頃から彼らのラブリな姿に癒され続けている。さて、そんな関係で、「南極」というキーワードは、成長過程の様々な場面で手に取ってきた材料である。先日、キムタク主演の2011年放送のドラマ「南極大陸」を今更ながらに見て、南極観測船「宗谷」と当時の状況に興味を沸かせてきた。

「宗谷から南極写真第一報」という記事が読売新聞に掲載されたのは、1957(昭和32)年1月9日の夕刊1面である。そこには、森松隊員撮影の写真と共に「浮氷群のあちこちにアザラシやペンギンが遊んでいて船が近づくと「変なやつが来たな」という顔付きでこちらを見る。」とある。苦闘を続ける宗谷と隊員を、ドボガンしながら横目に見る皇帝ペンギンを想像して独り楽しんでみる。

過去の新聞記事を眺めていると、書籍から得るよりも、より当時の人々の生活風景や息遣いが具体的に想像の中へ入ってくるように感じる。1月28日に朝刊1面へ掲載された社説「宗谷南極着岸に成功す」、そして連日のように掲載される宗谷関係記事からは、当時の人々の期待、熱狂を伺い知ることが出来る。「今日の宗谷」情報は、未知の世界への憧れと共に人々の心を掴んだのだろう。

宗谷南極発の記事は2月17日夕刊3面に掲載され、記事中には「おみやげ用にペンギン室」とある。「乗組員がタックルして十三羽つかまえた。内地へのおみやげに持帰るため船の前甲板にはペンギン用特別室がつくられた。」大らかな時代である。ふと、動物園から、ペンギンをキャリアバッグに入れて盗んだ男を思い出した。「バツ

グにペンギン詰め盗む 容疑の男逮捕/長崎県警」2010年1月28日西部朝刊社会面もどうぞ。宗谷帰還の記事は、4月24日朝刊1面トップであるが、同日の夕刊5面に「お土産のペンギン二羽」とある。十三羽は金曜日に捕まえたそうで、縁起が悪いという理由で放してしまったそうだ。お土産の二羽は帰途のケーブタウンで購入したものとか。十三羽の子孫は今も南極で元気であろうか。

新聞記事は、事件を時系列で整理し、事実を知る必要がある際には、非常に重要な情報源となる。特にヨミダス歴史館(読売新聞)は、1874年以降、開蔵II(朝日新聞)には、1879年以降の記事が掲載されている。その他、掲載時期は短い、日本経済新聞、毎日新聞、西日本新聞もデータベースを整備している。紹介した記事も全てワンクリックで検索・閲覧が可能だ。

大学生生活、特に何かしらのアウトプットが必要な際には、新聞記事を参照して、様々な事実を収集し、比較し、自分なりの分析を加えていくことを繰り返すとよい。最新事例を知ることが出来るが、それ以上に、「なぜ記事として取り上げられたのか」「記事になった背景は何か」「新聞社や記者の意図は何か」ということを、各社の記事を読み比べて考えることは、よい社会訓練になる。このような経験が、自信を持って自分を語る事が出来る社会人の入口へと繋がっていくことになるのではないだろうか。

きっかけは、ペンギンでも構わない、と思う。



『南部キリスト教指導者会議記録、1954-1970』 (Records of the Southern Christian Leadership Conference, 1954-1970)

[教授閲覧室(5階視聴覚) 198/MR/REC 禁帯出]



この資料は、1960年代のアメリカでアフリカ系アメリカ人の公民権獲得にその生涯を献げたマルティン・ルーサー・キング牧師 (Martin Luther King, Jr., 1929-1968) の活動母体「南部キリスト教指導者会議」(Southern Christian Leadership Conference、以後SCLC) の、その創設前夜からキング暗殺の2年後までの書類群です。資料は全4巻 (Part1~4) のマイクロフィルムに収められていますが、大学図書館の所蔵はその内の第1~3巻です。2005年から購入が始まり、現在購入手続き中の第4巻目が到着すれば1954年から1970年の全資料が揃うことになります。終生バプテスト派の牧師・神学者として在ったキングの活動記録を、同じくバプテスト派の伝道者養成を使命とする神学部が購入の要請をしたのは、理に合ったことでした。

SCLCは、1957年、キングが中心となって、人種問題に高い問題意識を持っていた南部地方の若手黒人牧師達で組織されました。後年これら牧師達は、南部全域に散らばって公民権運動のリーダーシップをとりましたので、そういう意味では、SCLCは、国内におけるその後の運動を牽引する象徴であったばかりか、実質的な先駆的存在であったと言えます。その活動は、白人社会に人種差別撤廃の要求を突きつけるだけに留まらず、アフリカ系アメリカ人が自立した個人としての自覚を持つように覚醒し、自ら運動の担い手となるための教育や訓練も行いました。南部を越えて広く北部の諸団体とも連携し、公民権運動の理念と活動を広めました。類似した使命を掲げる「有色人種地位向上協会」(NAACP, National Association for the Advancement of Colored People) とは異なり、地域の市民団体、超教派の牧師会や教会とのチームワークを重視し、そのネットワークをフルに活かして全米を視野に入れた活動を展開しました。その取り組みは、人種差別撤廃の法整備の要求から、アフリカ系アメリカ人の参政権獲得、住宅問題、就労支援、在米ユダヤ人のサポートからベトナム戦争反対に至るまで、実に広範囲に及びました

既に述べたように、大学図書館所蔵のSCLC資料は第1~3巻 (Part1~3) で、リール総数は53本に上ります。その書類群はSCLC内の各部署でよく整理、保管されていたことが一目瞭然です。内訳は、Part1 (リール番号1~21) 「Records of the President's Office」、Part2 (リール番号1~22) 「Records of the Executive Direc-

tor & Treasure」、Part3 (リール番号1~10) 「Records of the Public Relations Department」で、それに今年度搬入予定のPart4 (リール番号1~29) 「Records of the Program Department」が加わります。

各巻資料の概要は次の通りです。Part1 「Records of the President's Office」には、SCLC理事長のキングに宛てられた関係諸団体からの書簡 (NAACP, Southern Conference Education Fund, Mississippi Freedom Democratic Party, Council of Federated Organizations, Student Non-Violent Coordinating Committee他)、セルマやシカゴの人種問題に関する書簡や関係書類、ベトナム反戦、モントゴメリーのアフリカ系アメリカ人への爆破事件に関する文書類とそのキングの書簡、公民権運動一般に関する新聞・雑誌の切り抜き、インタビュー記事、キング宛の個人書簡、寄付者 (団体、個人) への謝意を表したキングの手紙、キングの演説と説教等が収められています。その中には、紙片に走り書きされたキングのメモ、キング自身がタイプを打ち、何ヶ所も手書きで校正が加えられた原稿や、書簡の下書きもあります。Part2 「Records of the Executive Director & Treasure」には、歴代の常任理事 (Ella J. Baker; Andrew J. Young) からキングへの報告書、学生公民権組織 (Student Non-Violent Coordinating Committee) 主催のフリーダム・ライド (Freedom Ride) への思想的・具体的支援の文書類、ワシントン大行進遂行に関する文書、非暴力による社会変革のためのワークショップ開催記録、各種収支報告書が収められています。Part3 「Records of the Public Relations Department」には、SCLC沿革、キング略歴、キングの講演とメディア出演の諸記録、SCLCとキング両者による報道機関宛の文書、SCLCニュースレターとパンフレット、SCLC総会と理事会記録が収められています。

デジタル化された資料に慣れている私たちには、マイクロフィルムの閲覧は「苦行」に近いものがあります。しかし、キングやアメリカの公民権運動に関心を持つ者には、紛れもなく垂涎の資料です。大学は、キング研究に関する第1級資料の一部を所蔵していることになります。本資料は国内外のいくつかの大学図書館に所蔵されていますが、ネット上の閲覧に制限がかけられています。将来的には、本学の事業として本資料のデジタル化が検討されることを希望します。

編集後記

読書の秋ですね。皆さんは本誌を何で読んでいますか？

私は、先日、電子ブックを初めて買いました。電子ブックってスマホでも十分読めるんですね・・・これからアカデミックな資料にも挑戦しようと思います。

さて、西南学院大学は、10月1日に機関リポジトリを公開しました。本学の研究成果もどんどん電子の世界へ旅立ちます。興味のある方は、以下のURLをご覧ください。

西南学院大学機関リポジトリ <http://repository.seinan-gu.ac.jp/>

(R.S)

西南学院大学図書館報 No.177

2014 (平成26) 年10月31日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバー (No.153~) も上記サイトに掲載しています。